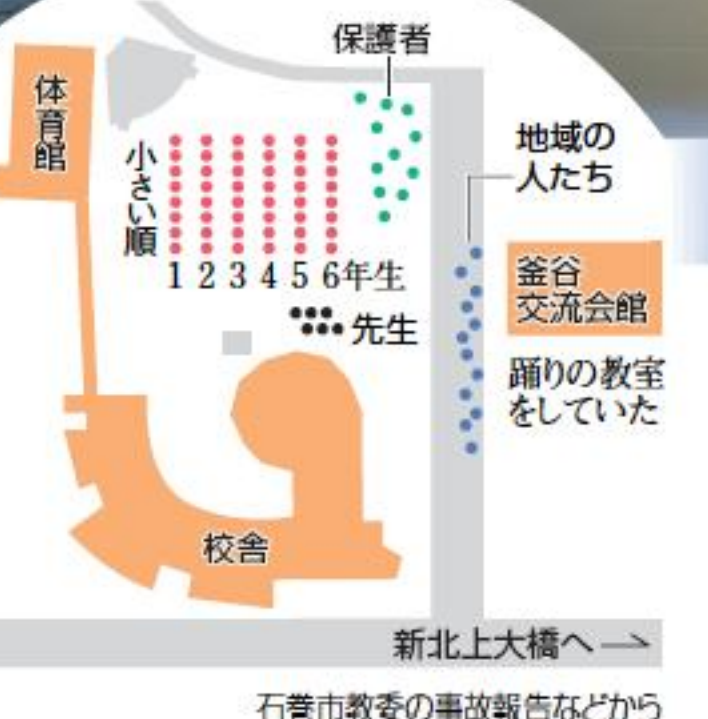


大川小学校の避難状況

避難した人たちが実際に通ったルート → 避難する予定のルート → 助かった児童の動き



① 午後2時46分 地震発生 校内の放送機器が使用不能となったため、教務主任教諭が校舎内にいる教職員と児童に校庭へ避難するよう伝えた。児童は校庭の中央付近に集合し、学年ごとに整列した。校庭には学校に戻ってきた下校途中の児童や、迎えに来た保護者、地域の人たちもいた。

② 午後3時25分ごろ 移動を決定 学校側は、児童らをつれて新北上大橋の三角地帯に避難することを決めた。6年生を先頭に列を作って、校庭から釜谷交流会館の横を通って山沿いを進んだ。右折して民家と民家の間の小道に入り、三角地帯に続く県道に出ようとした。

③ 午後3時37分 津波襲来 先頭の列の左前方から黒いかたまりとなって津波が襲ってきた。ほとんど同時に学校側からも津波が来て、学校の前は波と波がぶつかるように渦を巻いた。先頭だった高学年の児童と教職員は、来た方向へ走って戻った。教務主任教諭は市教委の聞き取り調査に対し、最後尾から「山だ」と指示し、自らも山に登った、と答えている。

④ 助かった児童 波に運ばれ山の中腹に埋まった5年の只野哲也君、一度波にのまれたが、ヘルメットの空気が浮力となり、偶然流されてきた冷蔵庫に手をかけて舟のようにして乗った5年男児、教務主任教諭と一緒に山に逃げた3年男児、波にあげられた1年女児が助かった。5年男児は、体半分が土に埋まった只野君を見つけ、右手で枝をつかみながら骨折した左手で土を掘った。



なぜ山へ逃げなかった

84人死亡・不明 大川小学校の悲劇

東日本大震災の津波で、全校児童の7割近くにあたる74人の児童と10人の教職員が死亡・行方不明となった宮城県石巻市の大川小学校。今回の震災で、教諭らによる避難誘導でこれほどの犠牲者が出た学校は、ほかになかった。なぜ、悲劇が起きたのか。ほかの学校との違いは何だったのか。

決まっていた避難先

牡鹿半島の北を流れる北上川沿いの低地に、大川小学校はある。河口の追波湾から南西に約4km、一帯の標高は1・5m前後だ。あの時、5年生のクラスでは「帰りの会」が行われていた。「起立」の音がかり、みんなが「来週も元気でがんばりましょう」。さようなら、と言おうとしたとき、地震は起きた。3月11日午後2時46分だった。みな机の下にもぐり、揺れがおさまるのを待った。地震で放送機が壊れてしまったため、教務主任の教諭が「校庭へ避難すること」と、校舎内を歩いて伝えた。児童らは校庭の中央に集まり、学年ごとに整列した。

そこまでの対応は、多くの学校がほぼ同じだった。大川小から北東に約9kmの相川小学校。眼前には太平洋が広がる。教職員がカウラジョに聴き入った。大津波警報の発令は2時49分。当初予測された津波の高さは6mだった。「考える余地はなかった」。教諭はそう振り返る。相川小の避難マニュアルでは、地震の時は校舎裏の山のほらまで逃げることにしている。過去の訓練通り、誘導の準備を始めた。

石巻市中心部に近い門脇小学校。サイレンのなか、校庭に集まった児童の点呼をとった。同小のマニュアルでも、地震の避難場所は裏手の日和山にある市立女子高校の方だ。大津波警報の前は、体育館への避難も考えたが、館内は山に登っていた。

だが、児童の一人は市教育委員会の調査にこう答えている。先生に「山へ登るの」と聞いたら、「登れないんだよ。あぶないから。校庭にいた方が大丈夫だよ」と言われたという。児童全員を山へ避難させる訓練は行われたことはなかった。

5年生だった只野哲也君(12)は、児童の列の前で教諭らが円になって話合っていたのを見て、「6年の児童が教諭の一人に言っていた。先生、山に逃げた方がいいと思います」

先生「校庭の方が大丈夫」

北上川をさきで大川小の北西約2kmの橋浦小学校。大津波警報を受け、裏山への避難を話し合っていたとき、教師たちは山崩れを目撃する。危険と判断せざるを得なかったという。

児童らは3階建て校舎の屋上へ避難した。橋浦小の敷地は浸水を免れ、周辺住民も含めて校舎内で一夜を明かした。

同じく北上川対岸にある吉浜小学校。本来は山手側に避難するこ

とになっていたが、時間がかかるのと判断から、3階建て校舎の上階へ避難した。児童5人と教職員は朝まで屋上で過ごした。

大川小の校舎は1980年代に建設された。2階建ての屋根は斜面を描き、大勢が避難できる屋上はない。津波はその屋根まで達した。職場などで警報を知った親には「裏山があるから大丈夫」と安心した人もいる。なだらかな斜面があり、日ごろから子どもたちは

坂の上三角地帯へ誘導

「三角地帯に向かうのについてきてください」

大川小の教諭らが誘導場所を決めたのは、市教委の調査報告書では午後3時25分ごろとなっている。校舎内の時計は3時37分を示して止まっており、報告書はこれを津波の襲来時刻としている。津波は目の前に迫っていた。

「三角地帯」は、同小から西に百数十m離れた新北上大橋もとの交差点付近。坂の上にあるが、

「高台」とはいえない。父親の一人は、子どもを迎えにいった妻から「小学校にいます」とのメールを受け取っている。時刻は3時29分。文面から緊迫感はいかたがえない。妻と2人の子もは学校周辺で亡くなった。

6年生から5年、4年と高学年順に列を作って歩き始めた。只野君は「なぜ山に逃げないの」と思っていたという。住宅地を通る道のすぐ脇には登りやすいところがある

石巻市河北総合支所の職員は避難誘導のため車3台に分乗し、北上川河口部に向かっていた。大川小を過ぎて1kmほど先にさしかかるととき、先頭の車の職員(56)は、河口付近の松林を白波が突き抜けて来るのを見た。波の高さは車を越えていた。

松原を越えて来た。高台へ避難を。助手席の同僚がマイクで叫ぶ。大川小の前を通過して三角地帯へ。そこで避難してくる車の誘導を始めた。車が途切れ、ふと後

逃れた他校「半分は賭け」

大川小から北へ約10km。南三陸町の戸倉小学校では地震前から避難場所をめぐって教職員が議論していた。

学校の裏手に高台があるが、国道を横断しなければならぬ。宮城県沖地震だと早ければ3分で津波に襲われる。4階建て校舎の屋上なら時間はかからないが、より高いところには逃げられない。結論が出ないまま、今回の地震に遭遇した。地震前の議論では屋上

上への避難を主張していた麻生川校長は、すぐに高台への避難を決定した。揺れの大きさと時間を長さを「想定外の津波が来るかも知れない」と感じたからだ。約10分後に全児童を避難させた。

その約20分後、海岸から200mに立つ校舎が津波に丸ごとのみ込まれた。波が高台にまで迫ったため、さらに上の神社に児童らを登らせた。

「半分は賭けだった」。麻生川小にいななかった柏葉照幸校長は

「遺体捜索を一緒に行わなかったことなど直後の行動が十分でなかった」と、亀山弘・石巻市長は「自然災害における宿命だと思っております」と述べた。

市教委の幹部職員が謝罪したのは、震災から100日の合同供養の席だった。父母の実態究明の要求を受け、市教委は8月、改めて聞き取り調査を始めた。

半年たち、遺族からは、専門家を交えた調査機関の設置を求める声が上がっている。

(川端俊一、三浦英之、吉田拓史、兼田徳幸、小川直樹、相原亮